

飛驒地域における有用広葉樹の産地化に関する調査

桂川道 出崎直人 竹ノ下純一郎

林 進※ 蒲 博司※※

目	次
I はじめに	32
II 調査方法	32
1. 広葉樹の賦存	32
2. 広葉樹の流通利用実態	33
3. 価格形成としての市売明細書の分析	33
III 調査結果	33
1. 広葉樹の賦存	33
1) 樹種別及び径級別蓄積	33
2) 地域別の蓄積割合	35
2. 広葉樹材の流通実態	35
1) 原木市売市場	35
2) 営林署土場	36
3) 製材工場	36
4) 家具木工所	37
5) 流通パターン	37
3. 広葉樹材の利用実態	38
1) 利用樹種	38
2) 用途	39
3) 価格	39
4. 広葉樹材の価格形成	41
1) 市売明細書の分析	41
2) 価格形成要因の分析	43
3) 今後の課題	43
参考文献	43

I はじめに

飛驒地域の民有林面積は、県全体の約28%を占めているが、このうちの広葉樹面積は約62%にものぼる。このことから飛驒地域が、広葉樹の生産地域であるとみることができる。

また、飛驒地域は古くから、これらの広葉樹資源を利用して、木工産業が地場産業として発達しており、工芸的価値にもすぐれた木工製品が作られ、工業生産出荷額に占める家具木工の出荷額も大きく、例えば、S55年度の高山市の出荷額は約245億円で、全体の38%に達している。

そこで飛驒地域での有用広葉樹の産地化や地場産業振興に役立てるという観点に立って、S57年度～S58年度事業として「飛驒地域における有用広葉樹の産地化に関する組織的調査事業」をプロジェクトチームを編成して実施した。プロジェクトチームは、学識経験者2人、業界代表者7人、県職員21人、営林署職員2人、村役場職員2人、計34人であり、調査結果について種々ご検討を賜わった。

II 調査方法

1. 広葉樹の賦存

S57年度、岐阜県林政部によって行われた広葉樹賦存状況調査の結果及び調査資料を加工利用した。この広葉樹賦存状況調査は、林野庁計画課監修「森林計画業務必携」の中の広葉樹賦存状況調査要領に

※ 岐阜大学農学部 講師 ※※ 岐阜大学農学部林学科 学生

よったが、調査林分は、齢級によって層化した各層ごとに標本数を決定し、計140林分を調査した。地域別の蓄積割合は、各市町村のha当りの樹種別蓄積から求めた。

2 広葉樹材の流通利用実態

原木市売市場、営林署土場、製材工場、家具木工所に対するアンケート調査を中心に調査した。

アンケートの書式としては、原木市売市場用、製材工場用、家具木工所用の3種類を作成し、それぞれの業態によって使い分けた。またアンケートの送付先としては、原木市売市場では、飛騨地域の7つの原木市売市場、営林署土場では、高山、久々野、荘川、古川、神岡、の5つの営林署を対象とした。また製材工場は、岐阜県の製材工場調査集計表（S56年度）より71工場、家具木工所は、飛騨地域の主な家具工場及び木工所を54工場選定した。なお、アンケートの回収率は、原木市売市場用が100%、製材工場用が62%、家具木工所用が56%であった。

3 価格形成としての市売明細書の分析

高山市内で広葉樹を主に扱っているM市場の昭和57年1月から12月までの計23回分の市売明細書を次の項目にしたがって分析した。

・市売別価格変動

樹種は、ブナ、ナラ、クリの3種を選び、ブナ、ナラについては、長級を2.1mに固定し、各径級区分（16～28cm、30～48cm、50cm以上）ごとに、またクリについては、径級を16～28cmに固定して、各長級区分（2.1m、3.0m、4.0m）ごとに市売別の価格変動を分析した。

・径級別、長級別価格差

高値と安値の価格差について、市売別価格変動と同様に分析した。

・樹種別買い手業者の買い付け頻度

ブナ、ナラ、ホオノキ、クリについて、市ごとに業者別買い付け極数を調べた。

・市別、樹種別、最高値、最安値で買い付けた業者の買い付け頻度

ブナ、ナラ、ホオノキ、クリについて、市別に最高値、最安値で買い付けた業者の買い付け極数について調べた。

・市別にみる平均単価と取扱い量の関係

ブナ材、径級30～48cmについて、平均単価と取扱い量の関係を調べた。なお、取扱い量は極数とした。

Ⅲ 調査結果

1. 広葉樹の賦存

1) 樹種別及び径級別蓄積

表-1に有用広葉樹の蓄積を樹種別、齢級別、径級別に示した。

これによると、ミズナラが約373万 m^3 で23%、コナラが約294万 m^3 で19%あり、これらナラ類を中心として、他に、ブナ10%、クリ10%、カエデ類7%、カンバ類6%など約20種類の有用樹種が総計約1,450万 m^3 、91%も分布している。

次に、齢級別、径級別の蓄積割合についてみると、ブナでは径級36cm以上のものが全体の63%の約104万 m^3 もあり、径級の大きいものの占める割合が多いのであるが、他のほとんどの樹種は、若い木や細い木の割合がかなり多くなってきている。したがって、小計の欄では径級4～16cmの小径木がほぼ半分の49%を占める結果となっている。

表-1 有用広葉樹の樹種別、年齢別、径級別蓄積

樹種 年齢		百㎡																			その他 の計		
		ブナ	クリ	コナラ	ミズナラ	カンバ類	ケヤキ	カツラ	シナノキ	センノキ	ヤチダモ	ホオノキ	キハダ	グサルミワ	カエデ類	ハンノキ	トチノキ	サクラ	ミズキ	小計			
1 ～ 2		(0) 0	(1) 186	(1) 273	(1) 204	(2) 164	(0) 0	(0) 0	(2) 4	(0) 0	(0) 0	(5) 172	(0) 0	(5) 123	(1) 114	(0) 4	(0) 0	(3) 143	(0) 0	(1) 1447	(2) 266	(1) 1713	
3 ～ 6		(6) 1016	(35) 5433	(38) 11318	(23) 8476	(46) 4196	(7) 70	(0) 0	(4) 98	(35) 321	(6) 23	(35) 1154	(62) 205	(2) 60	(23) 2442	(49) 2298	(2) 65	(57) 2968	(13) 261	(28) 40407	(27) 3799	(28) 44206	
7 ～ 10		(7) 1104	(28) 4384	(33) 9592	(36) 13478	(32) 2889	(66) 663	(18) 118	(28) 771	(25) 229	(11) 37	(41) 1340	(38) 128	(78) 1882	(26) 2865	(21) 1010	(6) 148	(19) 980	(18) 367	(29) 41985	(25) 3401	(29) 45386	
11 ～ 16		(62) 10378	(21) 3192	(9) 2505	(22) 8238	(13) 1247	(22) 227	(19) 122	(59) 1622	(30) 272	(81) 281	(13) 438	(0) 0	(4) 85	(29) 3116	(25) 1169	(76) 2020	(10) 512	(34) 693	(25) 36117	(24) 3285	(25) 39402	
17 以上		(24) 4057	(2) 294	(0) 0	(11) 4216	(4) 362	(5) 53	(0) 0	(6) 169	(10) 96	(0) 1	(2) 74	(0) 0	(0) 0	(6) 610	(1) 70	(9) 259	(6) 314	(4) 94	(7) 10649	(5) 672	(7) 11321	
計 尾		(1) 137	(13) 1921	(19) 5711	(7) 2694	(3) 252	(0) 0	(63) 402	(1) 33	(0) 0	(2) 6	(4) 136	(0) 0	(11) 257	(15) 1624	(4) 180	(7) 187	(5) 255	(31) 650	(10) 14445	(17) 2536	(10) 16781	
総		4 ～ 16cm	(8) 1470	(51) 7857	(73) 21497	(43) 16009	(57) 5194	(41) 414	(74) 474	(38) 1036	(12) 109	(55) 1824	(65) 217	(58) 1398	(67) 7196	(26) 1238	(9) 234	(80) 4152	(35) 724	(49) 71558	(83) 11464	(52) 89822	
		18 ～ 34cm	(29) 4778	(45) 6960	(26) 7516	(49) 18293	(39) 3584	(59) 599	(26) 168	(62) 1721	(44) 404	(9) 33	(43) 1440	(35) 116	(42) 1009	(27) 2933	(71) 3339	(71) 1893	(20) 1017	(65) 1341	(39) 57144	(16) 2236	(37) 59380
		36cm 以上	(63) 10447	(4) 593	(1) 386	(8) 3004	(4) 332	(0) 0	(0) 0	(0) 0	(44) 405	(0) 0	(2) 50	(0) 0	(0) 0	(6) 642	(3) 154	(20) 532	(0) 3	(0) 0	(12) 16548	(1) 59	(11) 16607
計		(100) 16695	(100) 15410	(100) 29599	(100) 37306	(100) 9110	(100) 1013	(100) 642	(100) 2757	(100) 918	(100) 348	(100) 3314	(100) 333	(100) 2407	(100) 10771	(100) 4731	(100) 2659	(100) 5172	(100) 2065	(100) 145050	(100) 13759	(100) 158809	
比率		10	10	19	23	6	1	0	2	1	0	2	0	1	7	3	2	3	1	91	9	100	

・岐阜県林政部：昭和57年度 広葉樹賦存状況調査による。

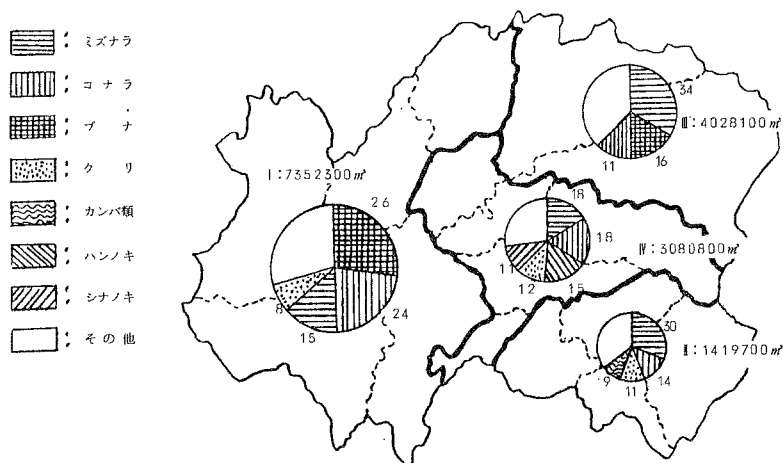
・()内の数字は比率を表わす。

こうしたことから、飛騨地域の広葉樹林は樹種的には有用樹種が多いが、その大きさをみれば、径級の小さいものが非常に多いということがいえる。

2) 地域別の蓄積割合

地域別の広葉樹の蓄積割合を図-1に示した。

これによると、各地域ともミズナラ、コナラのナラ類の割合が最も多い点で共通している。また多雪地域である宮川村、河合村、荘川村、白川村、清見村のⅠ地域と神岡町、上宝村のⅢ地域では、ナラ類の次にブナの分布割合が26%、16%と多くなっている。久々野町、朝日村、高根村のⅡ地域では、カンパ類の分布割合が9%と他地域と比べ多くなっており、高山市、古川町、国府町、丹生川村、宮村のⅣ地域では、ハンノキ15%とシナノキ11%の分布割合が目立ち、各地域での特色が伺われる。蓄積量をみると、最も多いⅠ地域は、最も少ないⅡ地域の約5倍もの量の7352300 m^3 となっている。



- 地域区分は気候、地形、植生の3要素による安藤の区分を基に、市、町、村境で区分した。
- 各地域の賦存量及び樹種別蓄積割合は 昭和57年度岐阜県林政部広葉樹賦存状況調査結果より算出。
- Ⅰ～Ⅳの地域区分には、次の市町村が含まれる。
 - Ⅰ ……宮川村、河合村、荘川村、白川村、清見村
 - Ⅱ ……久々野町、朝日村、高根村
 - Ⅲ ……神岡町、上宝村
 - Ⅳ ……高山市、古川町、国府町、丹生川村、宮村

図-1 地域別広葉樹の蓄積割合

2 広葉樹材の流通実態

1) 原木市売市場

原木市売市場における材の仕入先、仕入範囲を表-2に、販売先、販売範囲を表-3に示した。

仕入先をみると、素材業者からが約85%と圧倒的に多く、また仕入範囲は県内から約68%、東北、北海道から26%となっている。一方、販売先では、製材工場へ約39%、家具木工所へ約29%とこれらに多く販売されており、再び素材業者の手に渡るものは約15%ある。販売範囲は、県内が約84%、

表-2 原木市売市場における

単位: m^3 、%

仕 入 先					仕 入 範 囲					計
国有林	森林組合	素材業者	他の原木市場	自 家	県 内	東北・北海道	北 陸	東 山	東 海	
1,142	3,220	28,538	707	25	22,926	8,740	1,076	530	360	33,632
3.4	9.6	84.8	2.1	0.1	68.2	26.0	3.2	1.6	1.0	100

表-3 原木市売市場における材、流出状態

単位: m^3 、%

販 売 先							販 売 範 囲						計
素材業者	他原木市場	製材工場	家具・木工所	フローリング工場	合板工場	その他	県内	北陸	東山	東海	近畿	関東	
5,165	2,585	13,246	9,664	857	695	1,420	28,137	1,910	1,015	2,020	500	50	33,632
15.4	7.7	39.4	28.7	2.5	2.1	4.2	83.7	5.7	3.0	6.0	1.5	0.1	100

28137 m^3 と大部分を占めている。

これらのことから、原木市売市場の材の多くは県内からのものであり、これにさらに東北、北海道からの材を加え、ほとんどが県内の製材工場、家具木工所へ流れていくようである。

2) 営林署土場

表-4に国有林広葉樹材の販売先、販売範囲を示した。

これによると、販売範囲が約99%とほとんど県内であるのは原木市売市場と似ているが、販売先が製材工場に約74%と集中している点が異なっている。

表-4 営林署土場における国有林広葉樹材の流出状態

単位: m^3 、%

販 売 先						販 売 範 囲		計
素材業者	他原木市場	製材工場	木工工場	チップ工場	その他	県 内	北 陸	
3,143	315	19,093	1,171	1,407	589	25,546	172	25,718
12.2	1.2	74.2	4.6	5.5	2.3	99.3	0.7	100

3) 製材工場

製材工場における材の仕入先を、立木、素材別に示したのが表-5である。

表-5 製材工場における材の流入状態

単位: m^3 、%

立 木 買 い			計	素 材 買 い						計
国有林	公有林	私有林		国有林	公有林	素材業者	森林組合	原木市場	その他	
6,831	752	14, 525	22, 108	5, 368	9	17, 354	383	16, 709	5, 287	45, 110
30. 9	3. 4	65. 7	100	11. 9	0	38. 5	0. 9	37. 0	11. 7	100

立木買いの場合は、私有林からが14,525 m^3 で約66%とかなり多くの割合を占めており、素材買いの場合は、素材業者から17,354 m^3 で約39%、原木市売市場から16,709 m^3 で37%とこれらからの仕入れが多くなっている。したがって、製材工場は材の仕入れに関して、私有林、素材業者、原木市売市場と強く結びついているといえる。

また、製材品の販売先は、家具木工所への販売が多く、他に問屋や建築業者などがある。

4) 家具木工所

家具木工所における材の仕入れ先を、素材、製材品別に示したのが表-6である。

表-6 家具木工所における材の流入状態

						単位： m^3 , %				
素 材			材			計	製 材 品			計
国有林	素材業者	製材業者	木材集荷業者	原木市場	その他		製材工場	木材集荷業者	その他	
3,286	1,738	11	1,336	3,954	275	10,600	33,938	178	1,384	35,500
31.0	16.4	0.1	12.6	37.3	2.6	100	95.6	0.5	3.9	100

素材で仕入れる場合は、原木市売市場から、3,954 m^3 、約37%、国有林（営林署土地）から、3,286 m^3 、31%とこれらから仕入れが多く、製材品で仕入れる場合は、製材工場からが33,938 m^3 、約96%と圧倒的に多くなっている。ここで、これら3業態からの仕入れ数量を比べると、製材工場から極めて多く仕入れられていることから、家具木工所は製材工場との結びつきが最も強いといえる。

5) 流通パターン

これまでに述べてきた各業態における広葉樹材の流れをまとめると、図-2のようになる。

図中太い矢印は、量的に大きな材の流れである。

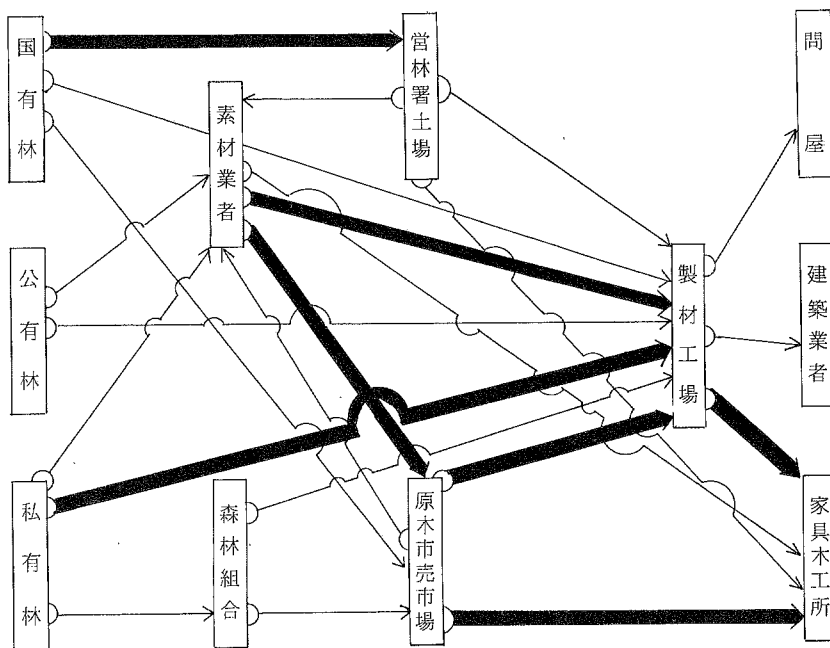


図-2 広葉樹流通形態のフローチャート

図-2から代表的な5形態をあげると、図-3のようになる。

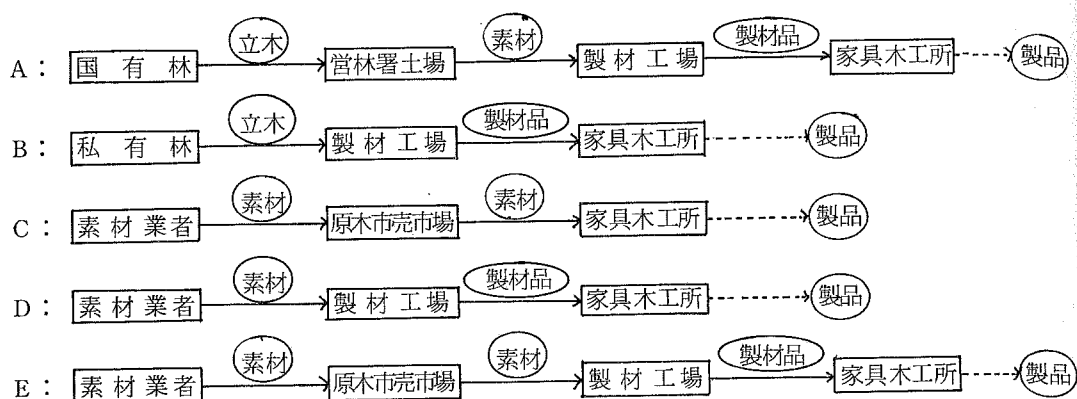


図-3 代表的な広葉樹材の流通パターン

これらの形態の中で、Aは国有林材の流通形態で特殊なものであり、B～Eのパターンが民間材の主な流通形態である。この中でより一般的な流通パターンはDとEのパターンである。これらのパターンの特徴としては、各業態がそれぞれの独自の役割りを1つずつ果たし、それによって製品形態は、その流れの中で、立木 → 素材 → 製材品 → 製品というように、1段階ずつ変化していくという点があげられる。そしてこのことが、材の円滑な流れに結びついていると思われる。一方Bでは、私有林から製材業者の間に素材業者が介在していないので、製材工場では自ら立木を買い付け、素材生産をし、製材しなければならない不便さがある。またCでも、原木市売市場から家具木工所の間に製材工場が介在しておらず、ここでも家具木工所が、製材設備を持っていないといけない不便さがある。

3 広葉樹材の利用実態

1) 利用樹種

原木市売市場及び営林署土場での主な取扱い樹種とその数量を表-7、表-8に示した。

表-7 原木市売市場における市場実態（取扱い樹種及びその数量） 単位：m³、%

樹種	ナラ類	ブナ	ホオノキ	クリ	トチノキ	ケヤキ	センノキ	サワグルミ	カンバ類	カツラ	ミズメ	ミズキ	シナノキ	イタヤカエデ	その他	計
数量	4358	5306	4797	4723	1331	2358	2244	1087	3656	704	1476	705	403	317	167	33632
比率	13.0	15.8	14.2	14.0	4.0	7.0	6.7	3.2	10.9	2.1	4.4	2.1	1.2	0.9	0.5	100

表-8 営林署土場における市場実態（取扱い樹種及びその数量） 単位：m³、%

樹種	ナラ類	ブナ	ホオノキ	クリ	トチノキ	ケヤキ	センノキ	サワグルミ	カンバ類	カツラ	ミズメ	シナノキ	イタヤカエデ	その他	低質材	計
数量	735	5233	415	44	624	46	102	272	533	120	176	353	66	99	6619	15437
比率	4.8	33.9	2.7	0.3	4.0	0.3	0.7	1.8	3.4	0.8	1.1	2.3	0.4	0.6	42.9	100

利用される樹種は、表一七、表一八に示したように、ナラ類、ブナ、ホオノキ、クリ、トチノキ、ケヤキ、センノキ、サワグルミ、カンバ類、カツラ、ミズメ、ミズキ、シナノキ、イタヤカエデなどがあり、その他を加えれば、その数は約 20 種類にもなる。また原木市売市場、営林署土場とも、取扱う樹種はほぼ同じである。

取扱い数量をみると、ブナが原木市売市場では5,306 m^3 、約 16%、営林署土場では5,233 m^3 、約 34%であり、両方ともブナを最も多く扱っている。原木市売市場では、次いで、ホオノキ約 14%、クリ 14%、ナラ類 13%と連続して続いているが、営林署土場では、ブナの次はナラ類約 5%、トチノキ 4%となっており、取扱い数量はブナに集中している。

なお、両者でブナが最も多く取扱われている点については、前述 1 の広葉樹の賦存と照らし合わせてみると、ブナは他の樹種と異なり、径級の大きなものの占める割合が多く、しかも量的にも多く存在しているので、現在利用できる径級に達している資源が豊富にあって、流通経路に乗ることができるということで説明ができる。

2) 用途

主な広葉樹材の用途について表一九に示した。

用途別にみると、家具用材は樹種の選択性が小さく、ブナ、ナラ類、ホオノキ、クリ、サワグルミ、ミズメ、シナノキ、ケヤキ、カツラ、センノキ、カエデ類と 14 種類もの多くの樹種が使われる。また民芸品には、ブナ、ケヤキ、センノキが使われ、鉄道枕木にはブナ、クリ、漆器素地にはクリ、ミズメ、トチノキ、ケヤキ、フローリングにはミズメ、カンバ類、ケヤキ、サクラ、さらに柄材にはナラ類、ホオノキ、クリ、サワグルミ、ミズメ、サクラなどが使われる。特殊な用途としては、シイタケ、ナメコ種駒(ブナ)、建築用土台(クリ)、マッチ軸木、下駄(サワグルミ)、杓子、箸(ミズキ)、妻楊子、綿棒(カンバ類)、経木(シナノキ)、社寺の柱や梁(ケヤキ)などがあげられる。

また用途の多い樹種には、ブナ、ナラ類、ホオノキ、クリ、ミズキ、ケヤキ、センノキなどがある。

このように樹種ごとに用途に多様性があることはもちろんであるが、さらにここでは、径級区分によっても用途が多様多様に及んでいることがわかる。このことは、樹種ごと径級ごとに複数の需要者がおり、同じ材でも需要者によって、用途が全く違ってくことを意味する。つまり飛騨地域は、樹種間、径級間での需要の交差弾力性の高い地域であるといえる。

3) 価格

原木市売市場における主な広葉樹材の径級別価格について表一 10 に示した。

これによると、径級の大小を通じて材価の高いものとして、クリ、ケヤキがあげられる。特にケヤキは径級が大きくなると、その材価は急激に高くなり、50 cm 以上のものになると 1 m^3 当り平均価格は 10 万円にもなる。反対に材価の安いものには、サワグルミ、イタヤカエデがあり、これらは径級が大きくなっても材価の伸びは少ない。またミズキは、前述したように杓子、箸などの小物に使われるため、14 cm 以下の小径木のうちから平均価格が 2 万円と非常に高い値を示している。ナラ類、ブナ、センノキ、ホオノキ、ミズメ、シナノキ、カツラなどは、ほぼ平均的な価格の樹種のものである。これらのことから、ケヤキは大径木仕立てにした方がよく、ミズキは小径木でもかなり高い収益をあげることができるといえよう。

表-9 主な広葉樹材の用途

樹 種 名	材長(m)	径級(m)	使 用 用 途
ブ ナ	2.1	28以下	家具用材, 土木用材, 枕木, 民芸品, 玩具, 刷毛材, シタケ・ナメコ種駒
		30~48	家具用材, コタツヤグラ(電気コタツ), テレビキャビネット, 器具材(スリコギ等), 集成材コア
		50以上	家具用材, 合板用挽板
ナ ラ 類	2.1	28以下	家具用材(テーブル足), 土木用材(矢板), 柄材(農機具, ホウキ)
		30~48	家具用材(曲木等), 柄材(農機具), テーブル用天盤
		50以上	家具用材, テーブル用天盤, 合板用挽板
ホ オ ノ キ	2.1	28以下	学習器材, コタツヤグラ, 玩具, 器具材(マナ板, 包丁柄, 餅延板), 柄材(農工機具)
		30以上	家具用材
ク リ	2~5	28以下	建築用材(土台, 押角), 枕木, 土木用材(水道工事用資材), 果樹栽培棚支柱
	2.1	30以上	家具用材, 柄材(木工器具), 漆器素地
サワグルミ	2.1	28以下	マッチ軸木, 家具用材, 下駄, 柄材
		30以上	学習器材, 家具用材
ミ ズ キ	2.1	28以下	杓子, 箸, 玩具
ミ ズ メ	2.1	28以下	フローリング, 家具用材, 床板用単板, 器具材(スプーン, ドア取手, ボタン, ソロバン棒)
		30以上	漆器素地, 測器, 柄材(農工機具)
ト チ ノ キ			漆器素地, くり物(盆), 器具材(木工品)
カンバ類	2.1	28以下	フローリング, 妻楊子, 綿棒, スプーン, アイスクリーム用スティック
シナノキ			経木, 家具用材
ケ ヤ キ	2.1	28以下	フローリング, 民芸品, 工芸品(寄木等), 器具材(小木工品), 挽板用フリッチ
		30以上	寺社建築用材(柱, 梁), 漆器素地, 民芸品, 家具用材, 挽板用フリッチ
カ ツ ラ			家具用材, 刷毛材, 学習器材
センノキ	2.1	28以下	家具用材, 玩具, 器具材(装飾小物), くり物(盆)
		30以上	家具用材, 民芸品, 建築用材(階段, 窓枠)
ハンノキ			スプーン, 刷毛材
サ ク ラ			フローリング, 柄物(刃物)
タ モ		30以上	建築用材(階段, 窓枠)
カエデ類			家具用材(曲木等)

表-10 広葉樹材の径級別価格(1㎡当り)

単位:千円

樹 種	径級	14 cm 以下			16 ~ 28 cm			30 ~ 48 cm			50 cm 以上		
	材長	安価	高価	平均	安価	高価	平均	安価	高価	平均	安価	高価	平均
ナラ 類	2.1m			12.0	17.3	25.4	23.4	27.0	42.7	35.5	31.0	50.0	45.8
ブ ナ	"			12.0	17.0	24.7	21.4	25.3	40.0	31.0	30.0	45.0	37.5
ク リ	"			15.1	18.0	33.0	25.0	28.0	63.0	48.5	35.0	80.0	60.0
ケヤキ	"	12.0	18.0	13.0	23.0	31.5	26.0	50.0	110.0	60.0	70.0	150.0	100.0
センノキ	"			12.0	18.3	24.7	22.8	31.0	49.0	36.4	35.0	62.5	51.0
ホオノキ	"	11.0	14.8	13.0	15.0	22.7	16.0	24.2	34.0	30.0	28.0	45.0	38.0
サワグルミ	"			10.0	12.0	16.8	15.2	16.1	24.5	21.5			
ミズメ	"			12.0	19.0	26.0	22.5	29.5	48.0	37.0	36.0	65.0	51.0
ミズキ	"	18.0	25.0	20.0	23.3	36.0	30.0			40.0			
シナノキ	"			12.0	18.0	24.0	20.0	23.5	33.5	26.0	36.0	72.0	42.0
カツラ	"			12.0	15.2	21.0	20.0	21.0	33.7	30.0	29.5	45.0	36.5
イタヤカエデ	"				12.0	21.8	20.0	18.0	26.0	22.5			

4 広葉樹材の価格形成

1) 市売明細書の分析

市売明細書の分析結果を図-4-1~6及び図-5に示した。なお、ナラについては分析結果を省略した。

① 市別価格変動 (図-4-1~6参照)

径級や長級が大きくなればなるほど、市別の価格変動が大きくなっている。また、全体的に見て、9月5日の市が最も安い値段になっている。

② 径級別、長級別価格差 (図-4-1~6参照)

径級別にみても長級別にみても、高値と安値の価格差は、径級や長級が大きくなるほど、大きくなる。

①、②の結果より、材の価格には材質要因が大きく影響してくるものと考えられる。

③ 樹種別買い手業者の買い付け頻度

ブナ、ナラ、ホオノキ、クリについて分析したが、買い手業者数は、ブナが18人、ナラが19人と少なく、ホオノキが29人、クリが43人と多くなっている。また、買い手業者の買い付け極数をみると、ブナ、ナラは買い付け極数が各業者に比較的分散しているが、ホオノキ、クリは、特定の業者がほとんどの極を買い付けている。

このような結果が出た理由として、ブナ、ナラはホオノキ、クリに比べ、その利用、加工量が多いため、業者間での素材獲得の競争が激しくなり、買い付けはその競争に勝てる者に限られてくるといことが考えられる。

④ 市別、樹種別、最高値、最安値で買い付けた業者の買い付け頻度

まず、最高値で買い付けた業者についてみると、買い付け極数が多い業者が最高値をつける回数も多くなるのは当然であるが、買い付け極数が少ない業者が、時として最高値をつけていることがあった。

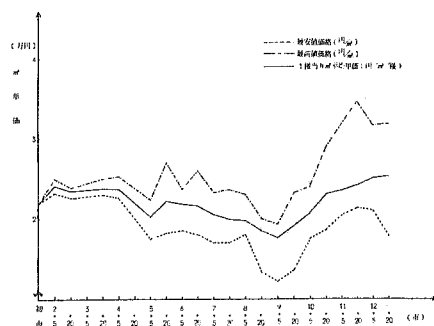


図-4-1 市別価格変動
ブナ 径級 16~28cm 長級 2.1m

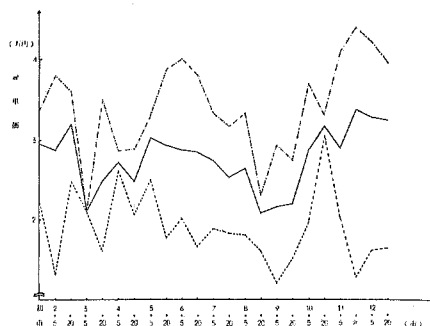


図-4-2 市別価格変動
ブナ 径級 30~48cm 長級 2.1m

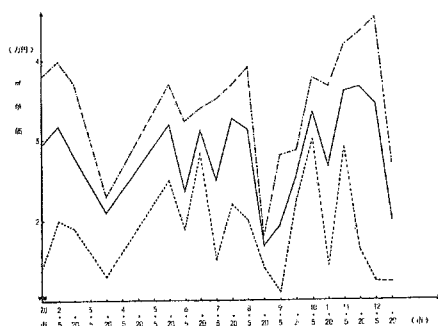


図-4-3 市別価格変動
ブナ 径級 50cm以上 長級 2.1m

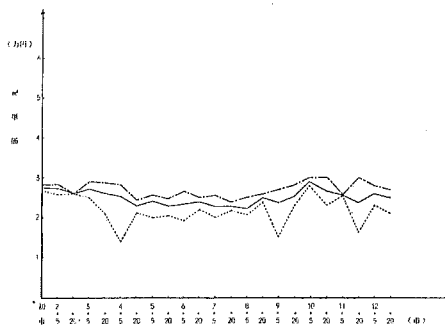


図-4-4 市別価格変動
クリ 長級 2.1m 径級 16~28cm

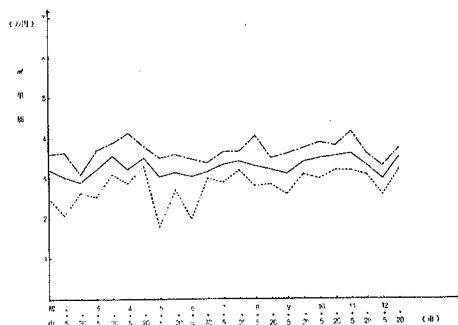


図-4-5 市別価格変動
クリ 長級 3m 径級 16~28cm

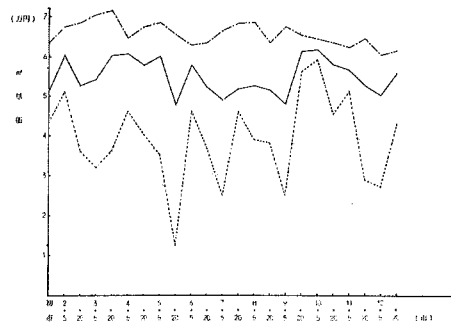


図-4-6 市別価格変動
クリ 長級 4m 径級 16~28cm

⑤ 市別にみる平均単価と取扱い量の関係 (図-5参照)

取扱い量の少ない時期と、平均単価の下落の時期と一致しており、この2つには密接な関係が伺われる。

2) 価格形成要因の分析

広葉樹材の価格形成要因は、大きく2つに分割することができる。1つは「利用システム要因」であり、もう1つは「材質要因」である。

① 利用システム要因

これは、「買い手要因」と「用途要因」とに分割できる。この2要因への分割は、針葉樹の場合、用途が一般的に定まっているという仮定条件のもとに価格分析がなされてきたことから、あまり検討されなかった。しかし、広葉樹材の場合には、その利用、用途が多種多様であるため、この2要因を厳密に考慮しなければならない。まさしく買い手によってこそ用途が決まり、その結果価格形成がなされるのである。この利用システム要因によって、広葉樹材の価格水準評価がなされる。

② 材質要因

これは材の質の良悪の評価にかかわる要因である。ヒノキ材の場合には、第1因子として直木かどうかということがあげられるが、広葉樹材については、今回の調査で第1因子が「鮮度」であることが判明した。すなわち、広葉樹材の場合は、ヒノキ材のように外見上の形質でなく、伐採、採材、集材、運材、販売という一連のシステムの円滑な作動が、価格形成にとって最も重要な因子となってくる。

したがって、材質要因による素材の序列化は、伐採から販売に至る素材生産流通システムの優劣によって根拠づけられることになる。

3) 今後の課題

広葉樹材の価格形成については、前述のように分析できたが、今後はこれまでに得た成果をどう「山」へ波及させるかが大きな課題となってくる。そのためには、広葉樹の素材市場分析のみならず、立木市場解析まで踏み込んで、立木商品の賦存量把握及びその評価をしていかなければならないだろう。

参 考 文 献

- 1 竹ノ下純一郎：飛騨地方の有用広葉樹林の造成 岐阜県の林業 昭和58年11月
- 2 岐阜大学農学部地域科学研究会 飛騨地域農林業総合整備計画—複合化への道— 昭和56年3月
- 3 大内幸雄、林進：高山における広葉樹材市場の研究 岐阜大学農学部研究報告第36号 1974
- 4 林進：地域林業をどう組立てるか—広葉樹林業のすすめ— 岐阜大学農学部研究報告第45号 1981
- 5 堀井日出男：原本市売市場における広葉樹材の販売構造 岐阜大学農学部卒業論文 1981
- 6 蒲博司：広葉樹材の価格形成機構に関する研究—高山市場を対象として— 岐阜大学農学部卒業論文 昭和58年度

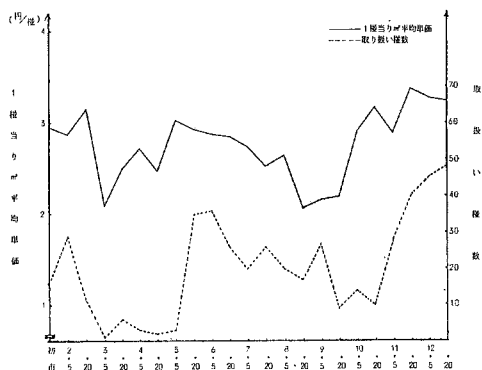


図-5 市別 1 桧当り平均単価 (円/m³/桧)
— 取り扱い桧数
ブナ 径級 30~48cm